

教育再生へのヴィジョン

現代は知名度や数値だけで人を判断・評価してしまう。便利なものや完成されたものばかりを追求し、自ら造りあげようとはしない。だから人を簡単に見切ってしまう。人は幾つになっても適材適所において成長するもの。思春期は人間性や能力が、信じられないほど変化する時期である。人の能力は、利他的で誠実な他人の存在によって開花する。人は、触れている他人によって大きく変わる。特に思春期は顕著なのである。この視点に立って、思春期の子育て、思春期教育、思春期の過ごし方を見直そう。

「代償を払う」という気持ちを持つ



日本人は、自分たちが文化として培ってきた大切なものを忘れてしまったことに、最近になってようやく気付きはじめたようです。子育てのできない母親、私利私欲に揺れる政治家や企業のトップ、身近に頻発する殺人事件など、ニュースのヘッドラインを見るだけで、「何かが間違っている」と思わざるをえません。より身近な問題としては、教育の荒廃によって人の心をふみにじるような子どもたちが増えてきたことから、大切なものの喪失を痛切に感じます。

原因を端的に言い表すのはとても難しいのですが、私は、日本人が依存心に侵され、代償を払うことを忘れてしまったためと思っています。

戦後、日本人は、さまざまな問題を処理することなく、次から次へと先送りしてきました。そうすることができたのはアメリカにしっかりと守られてきたからです。政治家や官僚はワシントンのご機嫌さえうかがえばよく、国民は官僚の言う通りに「ひたすら働けば幸せになれる」という時代が50年以上も続きました。それは、何の代償を払わなくても、人任せにしておけば、そこそこの暮らしは手に入るという50年でもありました。

その弊害として、私たちはすっかり依存心に侵されてしまいました。大人の精神は、まるで思春期前半で成長がストップしたかのようです。

こうした依存度の高い大人が子どもを育てると、その子どもが大人になる頃には、依存度はさらに増加します。戦後の高等教育を受けた依存族は、次々に依存度の高い人間を育ててしまいました。これが世にいわれる粗悪品の生産です。現在では粗悪品の再生産が進み止まるところを知りません。

依存の問題は、学校教育の現場では深刻な問題として現れています。ほとんどの教師には人を育てようという使命感などなく、子どもを育てるために「自分は何をすべきかを考える」という風潮はどこにも見当たらず、読書の奨励、たくさんの宿題、あわただ

しい行事や体験学習などで人を育てようとしています。読書、宿題、行事、体験学習のどれも悪いものではありませんが、手段として使うのではなく、それに依存し、「宿題を出したからそれですべてOK」という態度です。

親たちの依存度も高く、「してもらおうこと」を当然と思っています。私が実感しているのは、「知識の習得には厳しく、それ以外は子どもの自主性を尊重してほしい」と言い、しかし生活態度が悪くなると「何でもっと厳しくしないのか」という考えの親が多いということです。すべて学校任せが悪いわけではありません。任せてもらったおかげで子どもが大きく育った例がたくさんあります。ただ、わが子を育ててもらうのに覚悟を決めずに要望ばかりをぶつけてくる姿勢に問題があるのではないのでしょうか。

教師や親は依存心でいっぱいなのに、子供たちには自主性を求めます。ですが、現在さかんに言われるようになった、「自らやる気になる心」「自分で調べたくなるような高度な知性」は、教師自身が自主性を持ち、強烈に子どもの心に揺らぎをかけなければ育つはずはありません。

かつては自治、自主性、ゆとりを重んじる教育が流行しましたが、根付くことはありませんでした。結局、親の依存する姿を見て育った子どもたちは、さらにないものねだりをします。今こそ世の中の人々は考え直した方がよいのではないのでしょうか。してほしいと思う前に、自分が代償を払うことを考えるべきなのです。

アメリカ大統領、ジョン・F・ケネディーは就任演説でこう言いました。

「アメリカ国民の皆さん。国が貴方に何をしてくれるかではなく、貴方が祖国のために何をなすうるかを考えて下さい。世界の皆さん。アメリカが何をしてくれるかではなく、人類の自由のために、共に何ができるかを考えてください」

物質的な豊かさを味わった先進国の人々は、多かれ少なかれ依存的な精神に犯されていました。ケネディー大統領はそれをいち早く見つけだし、国家レベルで対策を講じていったのです。

ですから私たちも本来持っていた精神を取り戻さなくてはなりません。そのきっかけとなるような外国のおもしろい昔話を紹介します。昔読んだものなので多少のニュアンスの相違についてはご了承願います。



幾年も前、賢い王のもとに国のなかで知識豊かな者たちが集められました。

「われわれは素晴らしい社会を創り上げたが、われわれの得たすべての知識を後々の世代に伝えるためにも書き記しておく必要がある」と王は言いました。知識豊富な者たちは、王が望むもの完成するまでに

4年の歳月と26冊の書物を要しました。その情報のすべてを読み終えると賢い王は、「すばらしい。これぞ、まさにわれわれの必要とするものだ。しかし、長すぎる。この本を1冊に集約せよ」と言いました。

知識豊かな者たちは、2年間に渡ってそれに取り組み、何とか1冊にまとめました。その本を読んだ王は喜びながらも、「まだ言葉が多すぎるので1ページにするように」と頼みました。

1年後、知識豊かな者たちは王の指示を明確に理解し、忠実に従って考え出したことを1ページに減らしました。王はそれを読み終えると彼らの新しい発想を褒めましたが、もっと少なく1つの文にするよう求めました。

5年後、彼らは膨大な知識を一つの文に集約して参上しました。王はそれを見て大変喜び、「これこそが未来の世代が成功するために、理解しておくべき重要な情報なのである」と宣言しました。

そこには「タダの昼食などあり得ない」と記されていました。



アメリカンフットボールの名監督であるルー・ホルツ氏は、このストーリーの解説として次のような素晴らしいことを書き記していました。「すべての食事には値札がついている。人は世の中でやりたいことは何でもできる。さまざまな値札に見合った金額を払えば手に入れることができる。いいものを得ようと思ったら、それに見合った高価なものを払えばよい。

しかし、それを払えるだけの準備を自分でしなければならないことを忘れてはならない。あなたがなりたいと思うことは、必ず手に入るのである。しかし、そのためには喜んで代償を払わなければならないということだ」。

何をするにも代償はつきものです。われわれの依存病は「代償を払う」という考えを持つことで克服されていくのではないのでしょうか。そうすることによって初めて「精神の自立」と言えるのです。

教育は決して簡単なことではありません。楽に教育する魔法の方法など決して存在しません。教育にも代償が必要です。教師も親も代償を払うという姿勢で子供に接するべきなのです。

東風連続教育は、中高一貫教育のエキスパートが思春期教育を見据えたプログラムで子どもたちをサポートします。

つくば国際大学東風高等学校校長
(仮称)つくば国際大学東風小学校開設準備室長
吉田 富雄